日本磯漁伝統の研究 [Ⅷ]

―磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究―

田邉　悟

要旨

わが国の数多い海付きの村（島と内地の海ばたの村・浦磯岬の村）注(1)の中には、地先の磯漁場で、アワビ・サザエ等の貝類、ワカメ・カジメ・エゴ・テングサなどの藻類、ウニ・ナマコ・タコ・魚等の捕採をおこなって生計の主要なたしにしてきたところがある。それらの捕採対象物の漁獲方法をみると、ムラ（村）あるいは地域（区）によって同じでないことがわかる。すなわち、見突き漁による村、裸潜水漁による村、見突き漁と裸潜水漁を組みあわせておこなっている村などに分けることができる。本稿であつかう新潟県両津市北小浦（現佐渡市）及び新潟県佐渡郡相川町北狄（きたえびす）（現佐渡市）は、見突き漁、すなわち、「イソネギ」によって磯漁をおこなってきた村である。以下、魚貝藻（魚介）類の捕採をおこなってきた「イソネギ」の村の事例を詳細に掲げる。

キーワード

磯漁　イソミ（磯見）漁　見突き漁　イソネギ　アワビ　ミズダコ　海村文化　漁撈伝承

目　次

(1) 研究目的（承前）
(2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究
[Ⅰ] 新潟県両津市（内海府）北小浦の「イソネギ」
（一）はじめに
（二）地域の史的背景など
（三）漁業生産歴と漁法
（四）農業生産歴と農業
（五）イソネギ（漁法）と漁具
（六）その他の漁法と漁具
（七）テンゲ（漁船）・その他の聞取り
（八）まとめ
[Ⅱ] 新潟県佐渡郡相川町（外海府）北狄の「イソネギ」
（一）はじめに
（二）漁業生産歴と漁法
（三）農業生産歴と農業
（四）イソネギ（漁法）と漁具

（五）カンコ（漁船）・その他の聞取り
（六）まとめ

(3) 小括

(1)研究目的（承前）

わが国民は、「魚食の民」といわれるほど魚貝藻（魚介）類を食料とし、海の恵みに依存して生きてきた。その中でも磯漁場に生息するアワビは古代から特別な食材として、あるいは贈答品としてなど価値が高く、それは現在でも変わらぬ伝統を持ちつづけている。

そのアワビをはじめとする魚貝藻（魚介）類は、裸潜水漁撈者（海士・海女・蜑人）によって捕採されるほかに磯漁民（見突き漁民）によって捕採されてきた。

しかし、今日まで裸潜水漁撈者（アマ）による捕採の漁撈習俗等の調査・研究はかなりおこなわれ、その実証的な研究成果がある一方で、磯漁民（見突き漁民）による捕採の実態は不充分で、全国的な視野に立って俯瞰した場合、空白のともいえる未調査・研究の地域があまりにも多い。

したがって、本調査研究は残された空白地域の実態調査による事例研究であり、後日、日本全域における磯漁伝統の全貌を明らかにするための一事例である。

(2)磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[1]新潟県両津市（内海府）北小浦の「イソネギ」

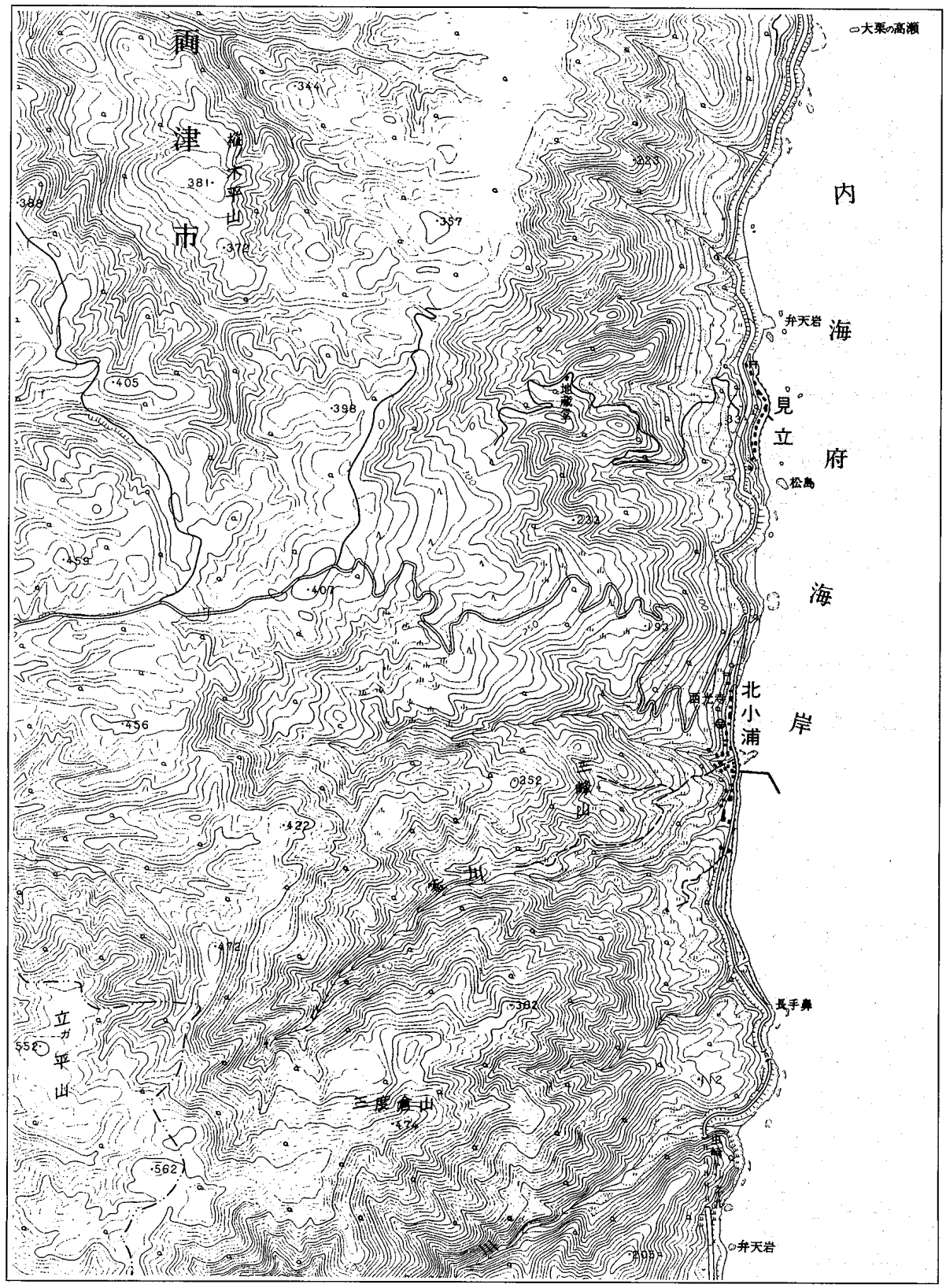
（一）はじめに

本調査当時の北小浦は、両津市内海府支所の住民票（昭和五十年六月二十日現在）によると三十四軒（世帯三十四）、男七十五人、女七十九人の合計百五十四人の村であった。（表(1)参照）

この海付きの村は、過去三回火災にあっており、地元の人々の言葉をかりれば「小浦の焼けっぱち」というのだと苦笑するほどで、明治時代にはいって二回、それ以前にも大火（オオヤケ）があったと伝えられている。それでも立派に立ちあがり、今日におよんでいるのは、海付きの村であるが、漁業にたよって生計をたてているのとは逆に、海はあまり利用されず、農耕生活、炭焼、放牧（牛）と山にむかっての生活の基盤が色濃く、それにかかわる比重が大きいため、住居は火災で失われても、生活にかかわる民具類等の製作に必要な原材料などをよういに入手できたという点にあったとみられる。

「まとめ」に掲げた聞取り調査の話者のうち、山口由太郎氏の所有する耕地は水田五反、畑二反五畝で、田の所有は村でも中ぐらいだが、畑は多い方であるという。村の中でも水田を多く所有している家は一町歩ほどあるが、一町以上の所有者はいなかったという。少ない家は一反ぐらいだと聞いた。

また、金子龍雄氏宅は水田五反、田だけでヤトコ（八ヶ所）つくっていた。畑は二反ほどを所有していた。北小



新潟県両津市北小浦（鷲崎）
国土地理院発行　1：25,000

表（1）　北小浦の家数と人口

No.	世帯主	男	女	合計
1	磯野一亥	1	2	3
2	浅井聰一	1	2	3
3	岩岸義男	1	3	4
4	岩岸義一	4	1	5
5	金子龍男	4	4	8
6	川上儀一	2	3	5
7	川端忠雄	2	3	5
8	北沢秀雄	2	4	6
9	北沢陽	3	3	6
10	北沢善好	2	1	3
11	北沢寛一	4	3	7
12	北秋男	3	2	5
13	小出慶作	4	4	8
14	小出義隆	3	1	4
15	小出哲司	2	2	4
16	斉藤昭子	1	1	2
17	斉藤敏夫	3	2	5
18	塩沢美	3	4	7
19	竹森正男	2	2	4
20	辻光夫	4	3	7
21	中村勇	2	1	3
22	南藤幸作	3	4	7
23	橋本信義	2	2	4
24	橋本チヨ	1	3	4
25	橋本政雄	1	1	2
26	橋本嘉業	1	4	5
27	古川三重子	0	1	1
28	本間義孝	2	1	3
29	山口隆右	2	4	6
30	山口由太郎	3	0	3
31	山口善保	1	5	6
32	山本正一郎	3	1	4
33	山本トヨ	0	1	1
34	渡辺英樹	3	1	4
35	合計	75	79	154

昭和50年6月20日現在

浦には水田を五反以上所有している家は三軒しかなかったというから、上掲の両話者宅は多いことになる。

（二）地域の史的背景など

北小浦の集落は過去三回も火災にあっている。したがって、史的背景を知るための史料等は焼失してしまった。

それでも本調査当時、村内在住の川端忠雄氏（屋号をマゴエム・マゴジューロウ・大正元年九月十三日生）宅にて若干の近世地方文書を拝見する機会に恵まれ、写真撮影をさせていただいた。しかし、その史料の内容からは地域の史的背景を明らかにするには至らなかった。

『海府の研究』注(2)によれば、「元和三年（一六一七）の北小浦の百姓は二十二人となっている。元禄六年（一六九三）の暮の百姓名寄をみると名主三郎兵衛、組頭弥吉、又右衛門ほか十六人とあり、計十九人、寛延二年（一七四九）には二十四人となり、ほぼ現在の戸数となった」とみえる。

また同書によれば、「北小浦では本百姓は十七人ときめられ、そのうち四人が長百姓、六人がそれに次ぐ重立百姓、残りが平百姓となっていた。このような百姓の序例については漁業に従事する場合にはあまり必要でなく、陸上の山の権利などをめぐって必要になってくる。近世の始めには喜兵衛が中使をしていた。北沢一族であったと思われるが現存していない。喜兵衛どんといって、もとは三浦氏だと伝えているがよくわからない。中使から名主にかわったときに喜兵衛のあとを継いだのが小出三郎兵衛家である」とみえる。

元和九年（一六二三）、北小浦村中使嘉左衛門ら本百姓ら全員が岩谷口の百姓衆に、「岩谷口村のやま、先年ささおたでかたひらより上へ、材木小づつもらい申故、少のさかな（魚）進申候、今度はせつせつはいた（薪）きりに参候間、…」とあり、トネを越えて北海岸の岩谷口で魚と交換に薪を手に入れている。さらに延宝七年（一六七九）の文書には、「三月より其方の山一ヶ年もらい、村中のもの共きり申候、此礼銀として印銀二十五匁、鱈二十掛進申候…其上御公方様御法度の杉あてび一本成共きり申間敷…」とあり、雑木や薪木の代銀として印銀二十五匁とタラが北小浦から岩谷口に渡されていた。岩谷口ではタラ漁はやっていなかったと思われるし、北小浦にタラ漁師のいたことがわかる。（前揚書・「高千・外海府近世文書」）所収

（三）漁業生産歴と漁法

上述の通り、北小浦ではテンゲ（クリブネともいう）に乗り、海底が岩礁地帯の漁場に至り、船上から棹の先端に取付けたカギ、ヤス等を用いて、アワビ・サザエを採取したり、ナマコ・タコ・磯魚のほかワカメ・アラメ・ツルモ・イゴ（エゴ）等の海藻を捕採する漁法を「イソネギ」という。

イソネギは毎年十二月初旬よりおこなわれ、翌年の四月下旬までつづく。この時期のイソネギではアワビ・サザエの他ナマコ・タコ・磯魚等の捕採が主である。タコはミズダコと呼ばれる種類の大型のタコである。

イソネギによる海藻採取はワカメを四月初旬から六月下旬までおこない、同じくアラメも時期は同じだが北小浦の地先にアラメは少なく、少量の採取にとどまる。

海藻のツルモは七月初旬より採取しはじめて、八月下旬までつづく。北小浦ではエゴをイゴと呼び六月初旬頃になると採取し七月下旬までの二ヶ月間つづく。

また、北小浦の地先ではウニはぜんぜん捕採できないと聞いた。

イカ一本釣は五月中旬頃になるとはじめられ、六月下旬頃までつづく。

マス一本釣は、はやければ一月の初旬頃から、遅くも二月初旬頃にはじまり、四月下旬までつづく。

アブラメ一本釣は九月初旬にはじまり、十月下旬までの二ヶ月間はおこなわれてきた。この地方でアブラメと呼ぶ魚名はアイナメのことである。

北小浦では以上のようにイソネギが主で、漁はすくない。春先から秋までは海に出ることも多いが十月に入ると海が荒れる日が多くなるため、漁業をする人は少ない。調査当時（昭和四十七年）には地先海面で定置網もおこなわれていたが、昭和三十年以降になってからのことであるという。

したがって、一年を通して漁業をおこなう人はいない。だが山仕事（炭焼）などは一年中やっている人もいたと聞いた。

（四）農業生産歴と農業

水稲は六月二十日頃に田植えをおこない、十月下旬頃に収穫した。

大麦・小麦はともに十月初旬に蒔き、翌年の六月中旬頃に収穫した。

ソバは秋ソバで九月十日頃に蒔き、十一月二十日頃にと

新潟県両津市北小浦（佐渡郡内海府）の漁業生産暦（旧暦）　山口由太郎氏聞書（明治37年10月28日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘　要
イソネギ	―	―	―	―								―	アワビ・サザエ ナマコ・タコ漁
				―	―	―							ワカメ
				―	―	―							アラメ 少量採取
							―	―					ツルモ
						―	―						イゴ（エゴ）
イカ一本釣					―	―							
マス一本釣	- - -	―	―	―									
アブラメ一本釣									―	―			

（昭和47年10月３日調査）
（昭和50年６月19日再調査）

り入れをおこなった。

大豆・小豆は、早ければ六月二十日頃に、遅くても七月初旬には蒔き、共に十月下旬から十一月初旬頃までには収穫をすませる。

馬鈴薯は三月初旬に植えつけをおこない、早ければ五月下旬に収穫したが、遅くとも六月二十日頃までには掘りあげた。

野菜としては、夏大根を四月中旬に蒔き、六月下旬には収穫し、秋大根を九月初旬に蒔き、十月下旬から十一月中旬頃までに収穫した。大根は漬け物にすることが多かった。昭和二十年の戦争が終る以前は秋大根を「タクワンダイコン」（沢庵大根）と呼び、そればかりを栽培しており、

新潟県両津市北小浦（佐渡郡内海府）の農業及び山仕事生産暦（旧暦）　金子シヅ氏聞書（明治32年12月25日生）

種類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘要
水稲							―	―	―	―			6月20日田植え
大麦・小麦	―	―	―	―	―	―				―	―	―	
ソバ									―	―	―		
大豆・小豆						----	―	―	―	―	----		
馬鈴薯			―	―	―	----							
大根				―	―	―			―	―	----		夏大根4月 秋大根9月
人参						―	―	―	―	―			
ゴボウ						―	―	―	―	―			
カブラ				―	―								
ネギ			----	―	―								
麻				―	―	―	―						
アワ・ヒエ・キビ				----	―	―	―	―	―	―			
＜山仕事＞													
炭焼	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	スミヤキは年中やっていた

（昭和50年6月19日調査）

夏大根はどこの家でも栽培していなかった。夏大根は戦後になって栽培されるようになった。

人参は六月初旬に種を蒔き、十月下旬頃に収穫した。ゴボウも人参とほぼ同じ頃に蒔き、収穫の時期も同じであった。

カブラ（蕪）は四月初旬に蒔き、五月下旬には収穫した。

ネギは早ければ三月初旬より、遅くても四月初旬に蒔き、五月下旬になると収穫した。

麻は四月頃に種を蒔き、七月中旬頃になって刈りとり、天日乾燥させる。

アワ・ヒエ・キビともに四月頃に種蒔きをおこない、十月下旬頃に収穫した。北小浦では雪の多い年には三月末ころまで山に雪が残っていることもある。したがって、昔は田植えもおそく、八十八夜よりも十日もたたなければ稲の種を蒔かなかった。そのような年には、雪が降るようになって、やっと稲刈りをおこなったりした。

アワ・ヒエともに、はじめは畑に種蒔きをして、十センチほど成長してから田圃に植かえすが、田の中でも土質のよい場所に植えるのが普通であった。

アワやキビは餅にして食べたり、キビは米にまぜて食べた。

山仕事では、「炭焼は北小浦における、ほんとうの商売」といわれたほど、重要な生業であった。地元では「スミタキ」と呼んできた。山林には共有のものもあり、個人所有のものもある。炭焼（スミタキ）のさかんな時には山が不足がちであったといわれるほど、山仕事に従事する人達が多かった。

（五）イソネギ（漁法）と漁具

イソネギは十二月初旬からはじまり、翌年の四月下旬頃まで、冬期、海の水が澄んで、海中・海底がよく見える時期におこなわれる。

冬はナギの日でも天候が急変することが多く、すぐ海が荒れて帰ってこなければならない日が多い。したがって、イソネギをおこなう漁場は村の地先の磯付きの場所。漁のためにベントウを持参することはまずない。

捕獲対象物の主要なものはアワビ・サザエはカギ・ヤスなどと呼ばれる漁具を用いて採取する。

アワビ採取用の「カギ」は鉄製の大型のもので、直径二センチもある大人の親指ほどの鉄の丸棒を曲げたもので、長さ二十五センチほどのものを、先端にかけてだんだん細く仕上げながら尖がらせていき、釣鈎状にしたものであるが先端にカエシはない。（写真・図参照）

この鉄製のカギの根元の部分に約三十センチから四十センチの長さの木材をうすくけずってしばりつける。この材はウシコロシと呼ばれる木を用いることになっている。

ウシコロシは北小浦の近くの山でも探し求めることができる弾力性のある材なのであり、しかも薄く削っても折れないという特性があるため、カギをアワビの殻の部分のすきまにかけ、力を入れてはがすのに最も適した材である。鉄製のカギは両津の鍛冶屋に出かけて購入した。

ウシコロシの材を用いた後部の棹にはカシの木の材を六尺ほどとりつける。アワビ採取をおこなう際、深い水深では十尋（約十五メートル）におよぶことがあり、柄をすべて竹棹（竿）だけにすると浮力が大きくて使用しにく

くなってしまう。そこで、先端の六尺ほどの部分の柄をカシ材にしておくと、カシは丈夫でもあるし、浮かないので良い。他の材質の木を使うと、やはり棹が浮いてしまって使うのに不便である。

サザエの採取には「サザエヤス」が用いられた。サザエヤスは木製で、よくしなうガマズメ（ミ）やウシコロシを材として選ぶ。ガマズメ（ミ）の材の先端を十文字に割り、そこにサザエをはさみ込めるように工夫したもので、ホコネ（棹・竿）の長さは約二尋ほど。あまり長くすると重くなってしまうので作業がしにくくなるため、個人的に長さを調整している。柄の後部にはマダケが用いられ、深い場所でサザエを採取するときには竹材の柄をつなぐ。（写真参照）

採取したアワビは売りに出したが、サザエ・ナマコ等は自家消費用であった。

近年、サザエヤスは鉄製のものが使用されるようになったが、北小浦で伝統的に使用してきたガマズメ（ミ）製の木製サザエヤスはサザエ採取のための伝統的な古い漁具として貴重な資料でもある。

また、ナマコは自家消費用ほどにとどまって捕採する程度であったため、「サンボンヤス」で突いた。売るための捕採ではなかったので、ナマコに傷がついてもかまわなかった。

北小浦では、ミズダコというとミズダコのオスのことで、ミズダコのメスをマダコと呼んできた。メスダコの方が大きいものが多い。タコは左右相称であるから、前方から右側四本の足（腕）、左側四本の足（腕）とよぶが、オスは右側の前から三本目の足（腕）が生殖腕になっているので先端部分に吸盤がない。これに対してメス（マダ

コ）は八本全部に吸盤があるので、雌雄はそこで見分ける。

タコ（ミズダコ）は「サグリヤス」または「ヤス」（三本ヤス）を使って捕獲する。サグリヤスは先端が二叉に分かれた鉄製のヤスで、鉄の部分は長さ約二十センチ。横幅は最も開いた部分で約四センチ。内側にむいてカエシがある。（写真参照）

この鉄製のサグリヤスに木製の柄を取り付ける。柄に用いる材はシロタモ。シロタモは柔軟性があり、大きくしなうので岩礁の割れ目にひそむタコを探り出すのに使いやすいという利点がある。したがって柄の部分は偏平に削って製作されており、幅は約二・五センチで、厚さは約一・三センチ。

ミズダコを捕獲するのは冬至の頃から翌年の四月頃にかけて。

まず、サグリヤスを使って、タコのいそうな岩礁中の穴を探る。

サグリヤスはその形状がオタマジャクシに似ているので、ゴウダラヤスと呼ぶのだと聞いた。また、佐渡の北小浦ではオタマジャクシをゴウダラ・ゴーザラというので、その形態が似ているところから「ゴウダラヤス」の名があるとか、タコ漁がおこなわれる冬期、産卵のために沿岸にやってくる「ゴウダラ」と呼ぶ魚を餌にして、サグリヤスの先端に付けてタコ穴を探るので、その名があるともいわれる。ゴウダラがオタマジャクシの大きな形状をしているので、そう呼ばれてきたらしい。（写真参照）

『海府の研究』注(3)によると、「マガリ（サグリ）ヤスを蛸穴にさし込み、タコが中にいることを確認すると、も

う一本のマガリヤス（二番ヤス）を穴の中に入れて追い出す」とみえる。そして、出てきたタコを「ヤス」（三本ヤスともいう）を用いて突き取ってあげる。（写真参照）

ヤス（三本ヤス）の柄の長さは八尺ないし九尺（二メートル八十センチほど）。そのあとに、さらにホコネと呼ばれるカシ材の柄でつなげることもある。水深によっては十尋以上の深さで漁撈活動（イソネギ）をおこなうこともあるので、さらに八尋ほどのマダケの棹（竿）を継ぎたして使う。二本ヤスもある。いずれのヤスもカシの柄を三間（三尋）ほどつけ、そのあとに竹（マダケ）を十四～五メートルの長さになるようにつける。カシ材を使うのは、深い場所にはやく沈むように工夫したものである。

イソネギで磯魚を突くときは、夏季が多かった。小型の「ヤス」を用いた。「ウオツキヤス」ともいった。主な漁獲物はアブラメ・カレイ・コチ・シンジョウなど。

イソネギにより採取する海藻の主なものはワカメ・アラメ・イゴ（エゴ）・ツルモ等であった。これらの海藻は「モテ」（モデ）と呼ばれる漁具により採取される。「モテ」は「藻手」という意味であろう。海藻を採取するために手の延長としての役割をはたす民具である。

モテはトウヅルとよばれる山から取ってきたツルを約六十センチほどの長さに二本あわせ、それを長い棒（棹）の先端に縛りつけただけの民具である。（写真参照）

深い場所での海藻採取の場合は、棹が沈まないと作業がしにくいこともあるので、一部分だけカシの柄をつける

ことが普通だが、浅い場所の海藻採取のときは竹棹（竿）を縛りつけるだけのこともある。棹材の竹はマダケを用いた。海藻は先端のトウヅルの部分にからげるようにして採取する。巻き取るといった方がよい。

トウヅルは藤に似ているが藤とは別のものだという。海藻がよくまきつくようにするたに、細い藁縄を巻いた。ワラは材質としては弱いものであるが、トウヅルによくなじみ、ずりおちてこないのでよかったと聞いた。後になってロープを巻きつけるようになった。ロープの材質はマニラ麻など。

ワカメ採取をトウヅルでつくったモテでおこなうと、ワカメが途中から切れてしまうことがあるので、ワカメ採取には「カマ」を棹の先に縛りつけて刈りとったりもした。カマを使用する場所は、ワカメが海底の岩礁からどのように生育しているかにもよる。したがって、海底の状況により、トウヅルのモテを使った方が能率的な場所、カマを使った方がよい場所など、それぞれの判断で使いわけた。

ワカメを刈り取るカマは、普段は草刈りなどに使用するものが転用されるだけのことで特別に専用のものがあるわけではない。

カシ材の柄を約一メートルほど付けたし、その後に竹棹（竿）であるマダケをつけた。カシ材の柄を一部分使用するのは、やはり棹を浮かせないようにする工夫であった。

イソネギをおこなう場合、船上から海中・海底を覗きこんで捕採対象物を探さなければならないが、潮流の影響や風などによって海面が荒れたり、さざ波が立つようでは海中・海底の様子をうかがうことはできない。

そこで、少しでも海中・海底の様子を見やすくするために、いろいろな工夫がなされてきた。北小浦ではイソネギをおこなう際に、イカのハラワタ（内臓）から出る油を海面に流し、海面の小さな波をできるだけしずめるようにして海中・海底を覗きこんだという。

『海府の研究』注(4)によれば「ガラス箱（箱メガネ）は磯ネギに共通して用いられる。小舟のトモで、ネリ櫂などとよぶ五尺（一・五メートル）ほどの小型の軽い一本の櫂を使って、（ネリ櫂）をかいて操船し、ガラス箱を使い岩礁や海底を透視して行う。ガラス箱が当地方で使われるようになったのは明治二十三年頃といわれ、それ以前はカスベやイワシの油、あるいはイカのナワタ（内臓）を腐らせた（ナシ）というものを、一升樽か周囲八～九寸（二四～二七センチ）の筒に入れ、それをワラで作ったホウキにつけて海面に撒き、海面の小波や反射をしずめて海底を透視して採取したという。これを（ナシフリ）と呼んでいた。この方法でも四～五尺（一・二～一・五メートル）四方にわたり、二～四尋（三～六メートル）の深さまで海底を見ることができたというが、ナシフリでの磯ネギは、もっぱら海の明るい冬至から三月頃までがその時期であった。磯ネギもナシフリからガラス箱に変わったことによって、透視水深も十八尋（二十七メートル）くらいまでにおよぶようになり、漁具も大型化し採取範囲も広まっていった」という。

のちに、ガラス板が普及するにおよび、北小浦で「カガミ」とよばれる箱形の水中メガネが使用されるようになった。（写真参照）明治三十七年十月二十八日生れの山口由太郎氏が子供の頃には、すでにカガミは使用されてい

たという。

カガミは杉材の枠を用いて自製したもので、ガラスは両津で買ったり、家の窓にはめてあるものを使ったりしてつくる。杉板材の枠の大きさは縦三十七センチ、横二十七センチで、深さ（高さ）は十八センチと割合に浅い。ガラスを固定し、水もれを防ぐためにはカミョリを竹製のヘラ（タケベラ）を使ってさしこんだという。このカガミには「サヤ」とよばれるケースが付けられている。サヤにおさめておくのは、船中でガラスが破損した時など危険なので、危険防止のためだという。北小浦の人々が使用するカガミには皆がサヤをつけているのが特色でもある。以上のことから、北小浦では明治時代の末期にはカガミを使ってイソネギがおこなわれていたことがわかる。

また、イソネギで特に重要なのは船を操るためのカイ（櫂）であるが、このカイ（ネリ）の使いかたも熟練しないとなかなかあつかえないものであった。操船については後に詳述する。（「サヤ」写真参照）

（六）その他の漁法と漁具

北小浦における「イカ一本釣」については、柳田国男の『北小浦民俗誌』[注(5)]に図示され、この本の中で民具をあつかったものとしては最も具体的な唯一の漁具であり記載である。

北小浦の地先にはイカが多かったので漁場は村の前にある長島の周辺であった。したがって、家から風呂がわいたからと大声でよべば、すぐに帰ってきたという昼間の漁であった。漁獲したイカは乾燥させてから売った。

漁場は浅い場所で七尋から十尋ほどだが、深い場所になると三十尋から四十尋におよぶこともあった。

イカ一本釣に用いる漁具は「トンボ」と呼ばれている。セトモノ（陶器の白い）のオモリの左右に一本ずつ、二本の八番線のハリガネを取り付け、さらに先端から釣糸を一尋ほどさげ、その下にトンボと呼ばれる擬餌鉤をつける。この擬餌鉤は鉛製のオモリの先端にカエシのない釣鉤を数本つけたもの。長さ約七センチほど。イカはこの部分にとりつく。

「マス一本釣」は一月初旬頃からはじまり、四月いっぱいまでおこなわれる。この漁法は両津方面でおこなわれていたものを導入したといわれる。名称は「一本釣」だが、実態は「マスの延縄漁」である。

この延縄漁に用いるウキ（浮子）をツケと呼んでおり、このツケをしかける漁場を同じく「ツケ」という。したがって、ツケの場所を決めるというのは漁場の位置を決めることになる。

毎年、年末になるとクジビキにより漁場ぎめがおこなわれた。この時は地区内の役員の改選もあわせておこなわれるので酒の席が用意された。

北小浦における地区の役員は、部落長、副部落長、会計の三役と、他に代議員が十名選出される。全役員が一年交代。

クジビキで漁場を決めるときは、カンジンヨリをつくって順番でひいたり、紙に番号を書いて、それをひいたりした。

調査当時、戸数は三十四戸（表一参照）であるが、以前には二十八戸の家数であったので、まずその数だけクジ

をつくったが、人によってはツケをよけいに入れたいということもあるので、その他に番外をもうけた。

北小浦におけるマスの漁場（ツケ）は、両津に最もちかい方面をカミ（上）といい、鷲崎方面をシモ（下）といった。したがって、一番の漁場は隣の集落に最も近い虫崎方面で、最後の番号は見立の集落に最も近くなる。

マス漁は一月、二月と最も海の荒れる季節なので、誰でもシケの日に遠くの漁場まで船を出すのはいやがったため、自分達の住んでいる地区のすぐ前の漁場を選ぶのはあたりまえのことである。したがってマス一本釣の漁場の選択は、豊漁を期待しての場の選択ではなく、できるだけ都合のよい場所の選択であった。

マス延縄は水深の浅い場所から沖へむかって延える。浅い場所は水深十五尋、深い場所で水深四十五尋ほど。こうした漁場は水深によって三つに区分されている。すなわち、浅い場所から「イソノマ」、「ナカノマ」、「オキノマ」と呼ばれ、マスは沖の「オキノマ」から釣れはじめ、最盛期をむかえる頃になると釣れる場所が「ナカノマ」に移り、その頃は「オキノマ」の場所にかかる魚の数は減りはじめる。やがて「イソノマ」でマスが釣れはじめると漁期も終りに近づく。ちなみに、佐渡から北陸地方にかけて、「マ」は「澗」と表記し、入江や湾、海岸の船着場や船曳揚場を意味する。

他人よりも多くの漁獲を期待してマスの延縄をいくつかの場所に延えることを希望すると、「番外」とよばれる漁場の権利を金銭を地区に支払って了承してもらった。地元としても収入源になるので、いくつかの番外をあらかじめ決めておいた。二十八戸あった時には、二つの番外をつくり、三十ほどクジをつくった。

マス一本釣をおこなうための具体的な漁具、漁法は、長さ約五十尋のシンナワとよばれる幹縄に五十本から六十本ほどのタテナワとよばれる枝縄をとりつけ、その先端に釣鉤と餌をつけておくが、シンナワ全体をイカリをうっ

て固定しておくという漁具を用いる。このイカリをうつことを「フラセ」というと聞いた。

五十尋ほどの長さのシンナワは稲藁を編んだ藁縄で太さは約二寸ほどのものが使われた。このシンナワの両端と中間の各所に桐材のウキを取り付ける。前述した「ツケ」がそれである。ツケは桐材の丸太で、長さ一尺、直径三寸ほどのものを五本、十本とたばねて縛りつけておく。さらにタテナワを縛りつけるシンナワの部分に長さ一尺、直径三寸ほどの桐材のツケも一本ずつしばり、その下にタテナワをたらす。タテナワをツケナワに縛る間隔はおよそ五尋おき。五十本から六十本のタテナワが使われる。タテナワの長さは十五尋から二十尋ぐらい長くすることもあった。

五十尋ほどのばしたシンナワの両端には桐材のツケを縛り、シンナワを固定するために海底までワラヅナ（藁綱）をさげて「トメ」とよばれる石のイカリ（錨）をうつ。ワラヅナの太さは約三寸ほど。トメは一俵の米俵に河原や海岸の石を十五貫から十六貫の重さになるようにつめこみ、こうして作った俵を四俵から五俵まとめて海底におろす。深い場所では約六十ダチ（尋）ほどに沈める。こうしてシンナワが移動しないようにした。

タテナワには綿糸が用いられた。先端に釣鉤をつけるまでの漁具の装置は複雑である。まず、綿糸のタテナワの先端にロクロとよばれる「ヨリモドシ」をつけ、その下に鉛製のオモリ、さらにテグスを三尋ほどつけてから釣鉤がつく。

鉛製のオモリは長さ一尺五寸ほどで、中心部に十二、三番ほどの針金を入れたもので重量は約百匁。オモリの重量は水深や潮流の影響を考慮して変化をもたせる。

また、場所によっては綿糸の長さが五尋から七尋、十尋というところもある。

釣鉤や針金等は両津に出かけて購入したものが使われた。

マスを釣るための餌にはイワシ、コマイ等が使われた。イワシ等の餌は両津の加茂にイワシを漁獲するタテアミがあり、そこで水揚げされたイワシを運搬船でとどけてもらったり、北小浦からも買いに出かけたりした。ハマガヨイ（浜通い）という船もあったので、船の人にたのんで餌を入手することもあった。

マス一本釣は、朝出かけてシンナワについているタテナワを一回あげおわると百五十匹も漁獲されたことがあるというが、こうしたときにはシンナワを何本も入れておくこともあった。

普通の時はタテナワを一本ずつあげ、魚をはずしては新しい餌を付けておろしていくが、六十本のタテナワのうち十数本も魚が釣れていれば多い方で、悪い時には六十本のタテナワの半分ぐらいがからんでしまっていることもあった。

釣鉤にかかっているマスは、ワダモとよばれるタモ網で掬いとる。ワダモを忘れていった時は素手でつかんでとったという。ワダモはトウヅルで輪をつくり、網の部分は麻糸を用いてつくった網をかける。網袋が深すぎると魚を取り出す時に手間がかかるので、浅くしたが、あまり網袋が浅いと、魚が跳ねてとりにくいので一尺ぐらいの深さに決めて作った。また、魚を活かしておくためには、網目を小さくしておくとウロコがとれてしまうので、できるだけ網目は大きく自製するように心がけた。船中のイカシガメに入れる。マスは鮮魚として両津に出した。

「アブラメ一本釣」は、九月から十月にかけておこなわれた。この一本釣はオカ（岡）からの釣りであるため、船を使わない。

長さ五尋ほどの竹棹（竿）を用いる。釣り糸には綿糸か麻が用いられたが、先端の五寸ほどの長さはテグスを使用。釣鉤は両津で購入したものを使った。餌はフナムシ（砂の中にいる）などを使った。

（七）テンゲ（漁船）・その他の聞取り

北小浦ではイソネギに使用する小型の木造和船をテンゲ・テブネ・クリブネなどと呼んでいる。全長五メートル五十センチ、肩幅一メートル二十センチ、深さ約六十センチほどの所謂、磯船である。

昭和の初期頃までは外海府（そとかいふ）方面（大佐渡の西側の相川方面）より船大工がこの小型の船を建造しに北小浦に来たという。外海府方面の人々は船づくりだけでなく、コビキ（木挽）をおこなう人や、コバ（木端）つくりをする人も多く、よく北小浦方面まで仕事にまわってきた。コバつくりなどは、屋根にコバを乗せ、さらに石をのせておいても三年ほどしかもたなかったので、定期的にまわって来たが、日当は特になしで、夜になって酒をふるまえば、それでチョン（なし）になったものだという。

船材には杉板が用いられる。材が良質で大きければシキ（敷き）は三枚。櫂を用いて船を操るが、この船の櫂を「テンガイ」といった。この小型の磯船をテンゲと呼ぶのは操船するのにテンガイを使うためかもしれない。「手櫂舟」という記録もある。注(6)櫂材はカシ、ナラ等。

テンガイは主に船を推進するために用いるための櫂で、イソネギをおこなうために操船する小型の「ネリ」また

は「ネリ櫂」と呼ばれる櫂とは異なる。ネリはイソネギをおこなう際、小さな動きで船を前後、左右に操船するために用いられる。

『海府の研究』[注(7)]によれば、「江戸時代中期は七尋（十メートル五十センチ）を基準にして、それより深いところは海士漁師の稼ぎ場、それより浅いところは磯ネギの場としていた。磯漁のことを磯ネギといっている。水津から岩首あたりまでは磯ナギというところもある。漁師に聞くとネギは〈櫂をネル〉というところからきてるいるという。『北小浦民俗誌』でいう山陰の海底をナギ採る意味に考えている漁師は少ない」と見えるが、この解釈のほうがしぜんである。また同書に、「ハンギリタライ船の櫂をネル場合ワラナワを〈ネリワ〉といっているが、カンコのトモのトコバで櫂をネル動作が磯ネギの重要なすがたであるから、イソネリからの転用語であるというのが実情にちかい。陸上の海にいちばん近いところをセドといい、浜があって海と陸との接点をヘタという。磯はサオダケで海底のアワビなどが採取できる程度までの深さを指している。それ以上はオキというが、場合によってはイソともいう」と記している。

テンゲを使用してイソネギをおこなう場合は、一人で出漁するのが普通である。漁場に着いてからは、トモに向いて座り、テンゲを後方に進めながら操業する。したがって基本的には船がバックしながら移動することになる。

また、テンゲを「クリブネ」の名で呼んでいるのは、以前はクリブネであったためだという。クリブネについてはその残存に関する報告を九学会連合会の調査報告書で小川　博氏がおこなっているのでそれにゆずる。[注(8)]

クリブネ時代には、船をネル時には櫂（ネリ）を用いたが、遠くへ行く時には櫓を用いて操船したという。

杉材を刳って製作した船は、風が少々吹いても、向きがすこし変わるだけで流されることもなく、ネギながら作業をするには良い船であった。それは、クリブネそのものが重いことと、海中に船が深く沈みこむためであった。クリブネは一軒に一隻はあったといってもよかった。しかし、北小浦では海の仕事（漁撈）に従事する家は全体の三分の二ほどで、山だけの仕事をする家が全体の三分一といった割合であった。とはいっても北小浦の人々が農業にかかわっていることは他の地区と同じである。

上述の通りテンゲ（クリブネ）の大きさをメートルにて示したが、伝統的には長さ十八尺から二十尺、肩幅は三尺というのが普通の大きさであったという。これは、直径三尺ほどの太さの杉材を刳りぬいて船をつくるのが一般的であったことによる。

船材を曲げて加工するには焚火の火に板をあてながら、少しずつしぼって曲げたという。また、コヌカ（小糠）を少しずつ燃し、そこに杉板材をあてて曲げたりした。

水もれを防ぐためにはヒワダ（ヒハダ）とウルシ（漆）を用いた。まず、ウルシを塗っておきそれからヒワダをつめこむ。

船材の杉板は北小浦で用意しておき、船大工は道具の他にフナクギ（船釘）やウルシを持ってきて船を建造した。ハリアワセの時はチギリを用いた。

昭和のはじめ頃は浜にフナゴヤ（船小屋）があったので、船を建造するには、その小屋が使われた。北小浦の人々が云うには、外海府は冬季になると風が強く海が荒れ、漁に出ることもできず、その日の飯も食えない人々が

多かったので、真更川方面より山越えをして北小浦などの内海府に出稼ぎにやって来たものだという。

（八）まとめ

この資料調査は著者が昭和四十七年（一九七二）十月三日に実施したものをかわきりに、その後、昭和五十年（一九七五）六月十九日～二十日、昭和五十七年（一九八二）一月十九日～二十二日、平成三年（一九九一）十二月二十六日～二十七日など、あわせて四回おこなったものの結果である。このうち昭和五十七年度の調査は九学会連合「日本の風土」調査委員会による文部省科学研究費補助金（総合研究A）の交付を得て実施したものである。

第一回目においては、当時、北小浦三五一番地に在住の山口由太郎氏（明治三十七年十月二十八日生）からの聞取りであり、「イソネギ」に関する民具調査が中心であった。

第二回目以降は、北小浦三〇九に在住の金子シヅ氏（明治三十二年十二月二十五日生）をはじめ、同金子龍雄氏（大正十二年十月二十五日生、北小浦三五五番地に在住の橋本政雄氏（大正二年一月十八日生）からの聞取りによるものである。なお、第二回目においても山口由太郎氏に漁業全般について聞取りもおこなった。

これまでに筆者は上掲げした話者の方々の御協力を得て、北小浦に関する二編の研究成果を発表することができた。「北小浦における民具と生活・民具研究と民俗学」（『日本民俗学の課題』・柳田国男生誕百年記念研究発表・

日本民俗学会編所収・弘文堂・昭和五十三年・一九七八）と「風土の中の民具伝統・北小浦民具誌」（『日本の風土』所収・九学会連合日本の風土調査会編所収・弘文堂・昭和六十年・一九八五）がそれである。

磯漁（見突き漁）をおこなっているムラ（村・地域）の中には、魚突き等をはじめとして、高度で専門的な技能やそれをささえるための知識を持っている人々（漁民）が存在することは事実である。しかし、逆に、北小浦のようにそれほど専門的な技術をもつこともなく、農耕生活や山の仕事（山樵・炭焼等）のほか牛の放牧などをおこなうあいまに地先の漁場で磯漁（イソネギ）をおこなってきたムラもある。それは同じ佐渡の外浦府にある北狄（きたえびす）も同じである。

このような事例をみる限りにおいては、磯漁（見突き漁）は、特殊な知識や高度な技をそなえた漁撈活動ではなく、本事例でみられるように、ごく普通の一般的（ポピュラー）な漁撈活動（漁法）であり、それがわが国の海付きの村々で伝統的におこなわれてきた初原的な形態であるとみるべきであろう。

すなわち、漁突きや深い海底での捕採活動をおこなうようなムラは支配的な形態ではなく、特別に発達した専門的な漁撈技術を伝えるムラで特別なという言葉があてはまるような数少ないムラであるとみることができる。例えば、神奈川県三浦市城ヶ島の「ボウチョウ」・（舫舡）などはその数少ない事例の一つに数えることができる。

したがって、磯漁そのものは、もともと専門的な漁法ではなく、ごくあたりまえの普通に誰でもがおこなえる漁法と位置づけてみることができる。北小浦における「イソネギ」の事例はその典型といえよう。

なお、本稿執筆の資料調査にあたっては、北小浦に在住の方々はもとより、当時、新潟県両津市郷土博物館の学芸員の職にあった池田哲夫氏（現在新潟大学教授）、間接的であるがあるが日本民具学会会員の岩野邦康氏（現新潟市郷土歴史博物館学芸員）の諸氏にご助力を得た。話者の皆様ともども末筆ながら謝意を表するしだいである。

注

(1) 柳田国男編『海村生活の研究』　日本民俗学会　八頁・十頁　一九四九年
(2) 両津市郷土博物館編『海府の研究』（北佐渡の漁撈習俗）　四七頁　両津市郷土博物館　一九八六年
(3) 前掲書　八三頁
(4) 前掲書　八二頁
(5) 柳田国男『北小浦民俗誌』（民俗学研究所編）　三省堂刊　一九四九年
(6) 前掲書（『海府の研究』・八五頁）「大正九年・新潟県水産試験場報告中に記載」
(7) 前掲書　（『海府の研究』・一五頁）
(8) 小川　博「漁業技術と習俗」『佐渡―自然・文化・社会―』九学会連合佐渡調査委員会編　平凡社　一九六四年

参考文献及び引用文献

柳田国男『北小浦民俗誌』（民俗学研究所編）　三省堂　一九四九年

田邉　悟「北小浦における民具と生活・民具研究と民俗学」『日本民俗学の課題』所収　柳田国男生誕百年記念研究発表・日本民俗学会編　弘文堂　一九七八年

田邉　悟「風土の中の民具伝統・北小浦民具誌」『日本の風土』所収　九学会連合日本の風土調査委員会編　二八九頁～三〇九頁　弘文堂　一九八五年

本間雅彦『舟木の話―佐渡杣小誌―』日本海文化研究所（佐渡郡畑野町おんでこ座内）　非売品　一九七一年

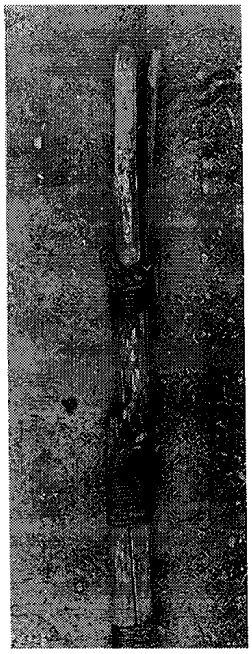
福田アジオ編『柳田国男の世界』（北小浦民俗誌を読む）　吉川弘文館　二〇〇一年

池田哲夫「蛸漁とタコセ・佐渡内海府の蛸漁」『もの・モノ・物の世界』（新たな日本文化論）　雄山閣二〇〇二年

両津市郷土博物館編『海府の研究』（北佐渡の漁撈習俗）　両津市郷土博物館　一九八六年

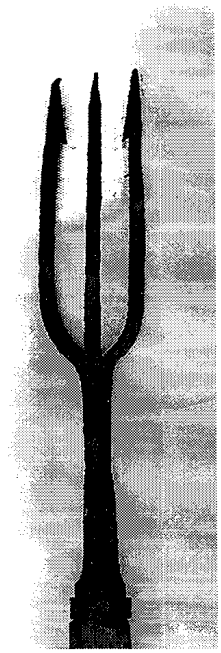
相川町史編纂委員会『佐渡・相川の歴史』資料集四「高千外海府近世文書」所収（岩谷口区有文書・こうら村　中使　嘉左衛門の他五郎助・兵次郎・孫左衛門が連名している）相川町史編纂委員会　五三三頁　非売品　一九七六年

池田哲夫『近代の漁撈技術と民俗』吉川弘文館　二〇〇四年

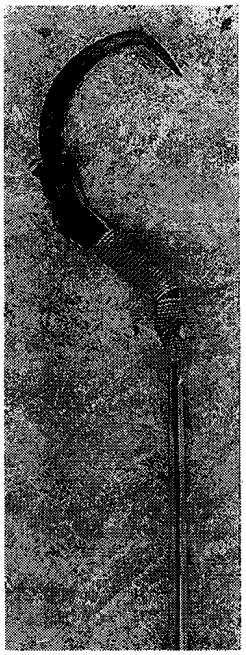


サザエヤス
(ガマズメ製)

サグリヤス
(ゴウダラヤス)



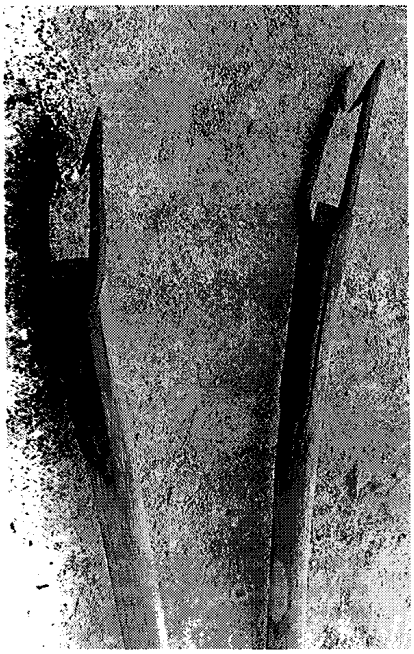
ヤス
(三本ヤス)



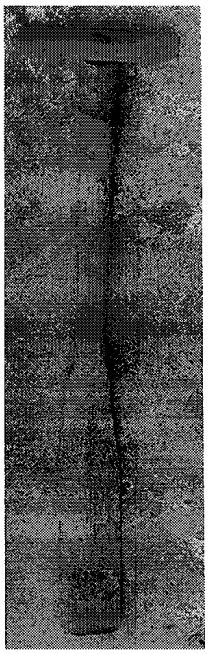
カギ

モテ

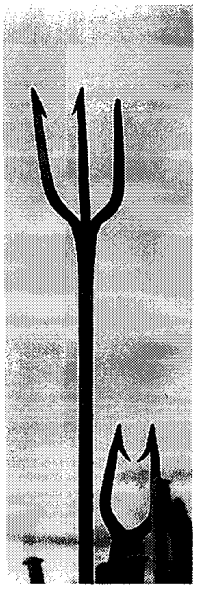
サグリヤス
(ゴウダラヤス)



サグリヤス(部分)
(ゴウダラヤス)

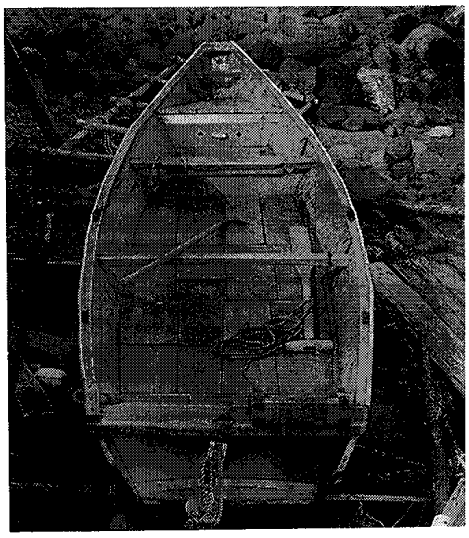


ネリ

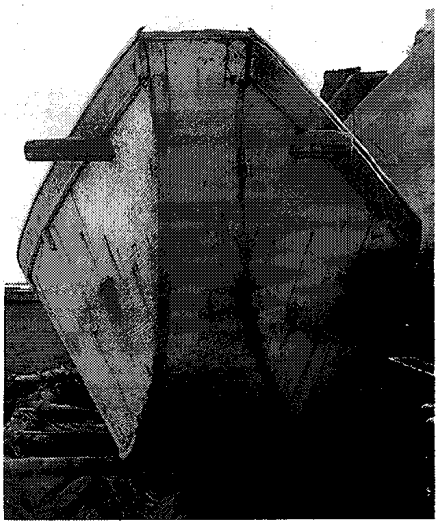


ヤス
（ウオツキヤス）

カガミとサヤ（右）

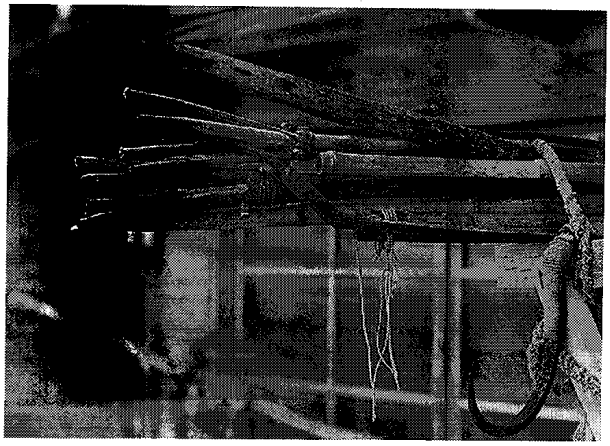


テンゲ



テンゲ（前）

右は軒下に収納した
イソネギ漁具



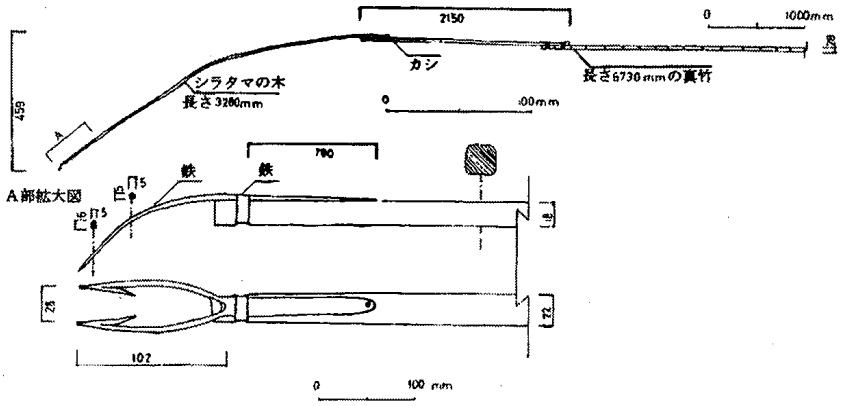
サグリヤス　サザエヤス　カギ

右は話者の
金子シヅ氏

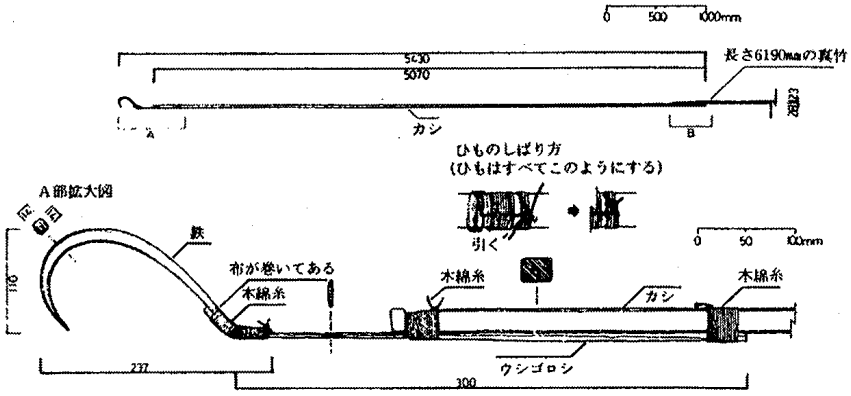
左は話者の
金子龍雄氏ご夫妻

北小浦点描

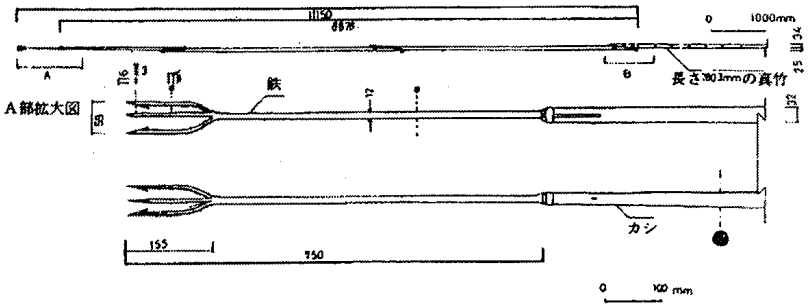
池田哲夫
「蛸漁とタコセ」
（佐渡　内海府の蛸漁）より
『もの・モノ・物の世界』所収
（転載）



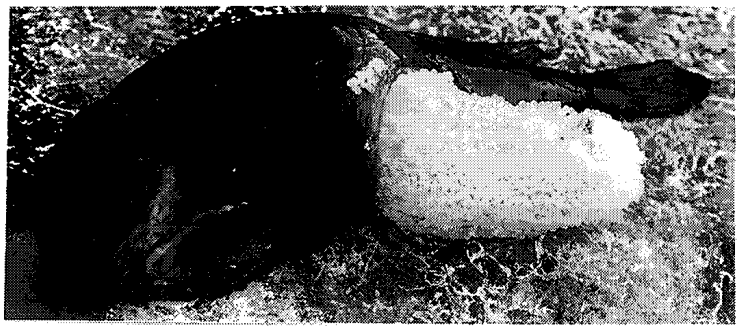
サグリヤス



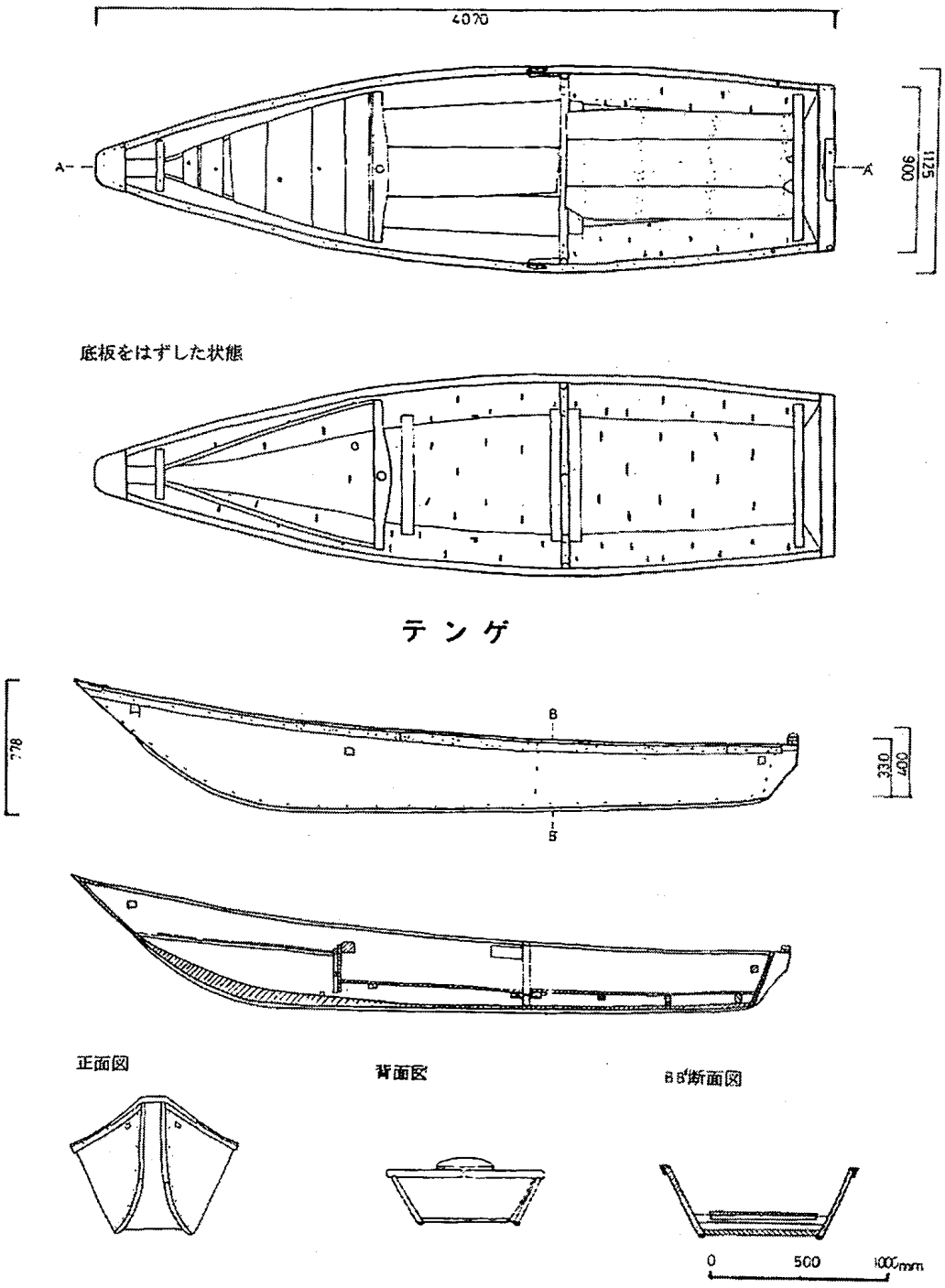
アワビカギ



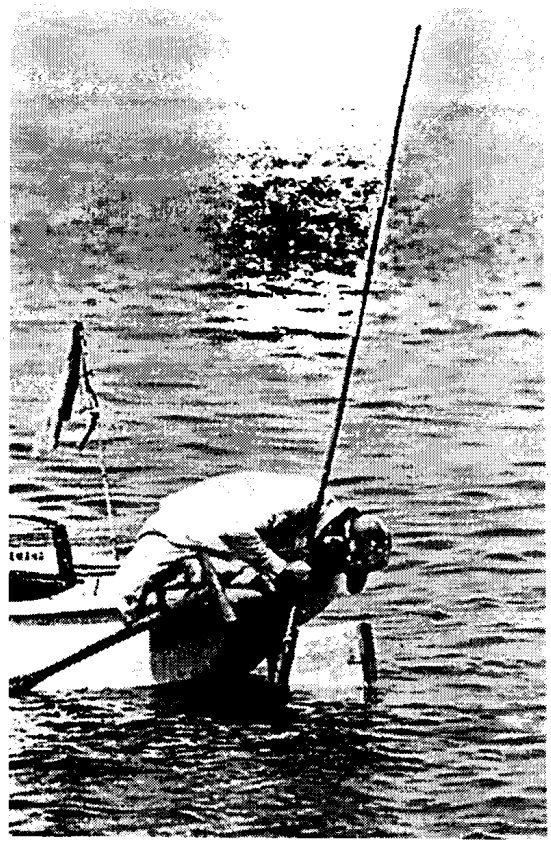
三角ヤス



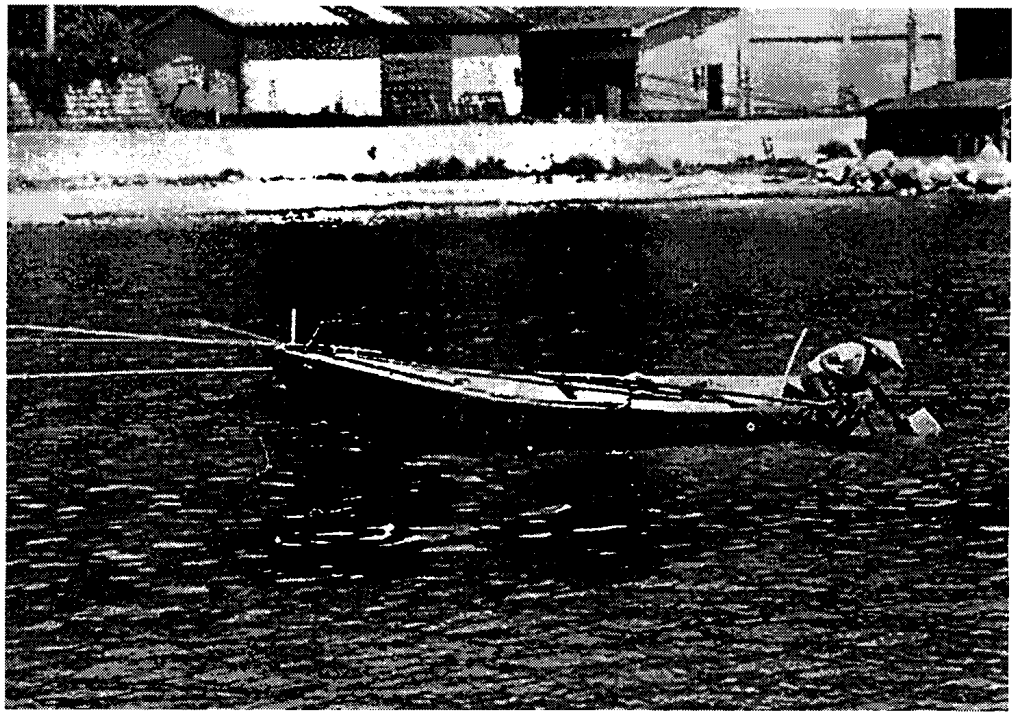
右ゴウダラ
（ゴーザラ）
腹部に吸盤がある
（１月の産卵期）



テンゲ　『内海府の研究』より転載



イソネギ（真更川）



テンゲを使っての
イソネギ（和木）

『海府の研究』より
転載

[Ⅱ] 新潟県佐渡郡相川町（外海府）北狄（きたえびす）の「イソネギ」

（一）はじめに

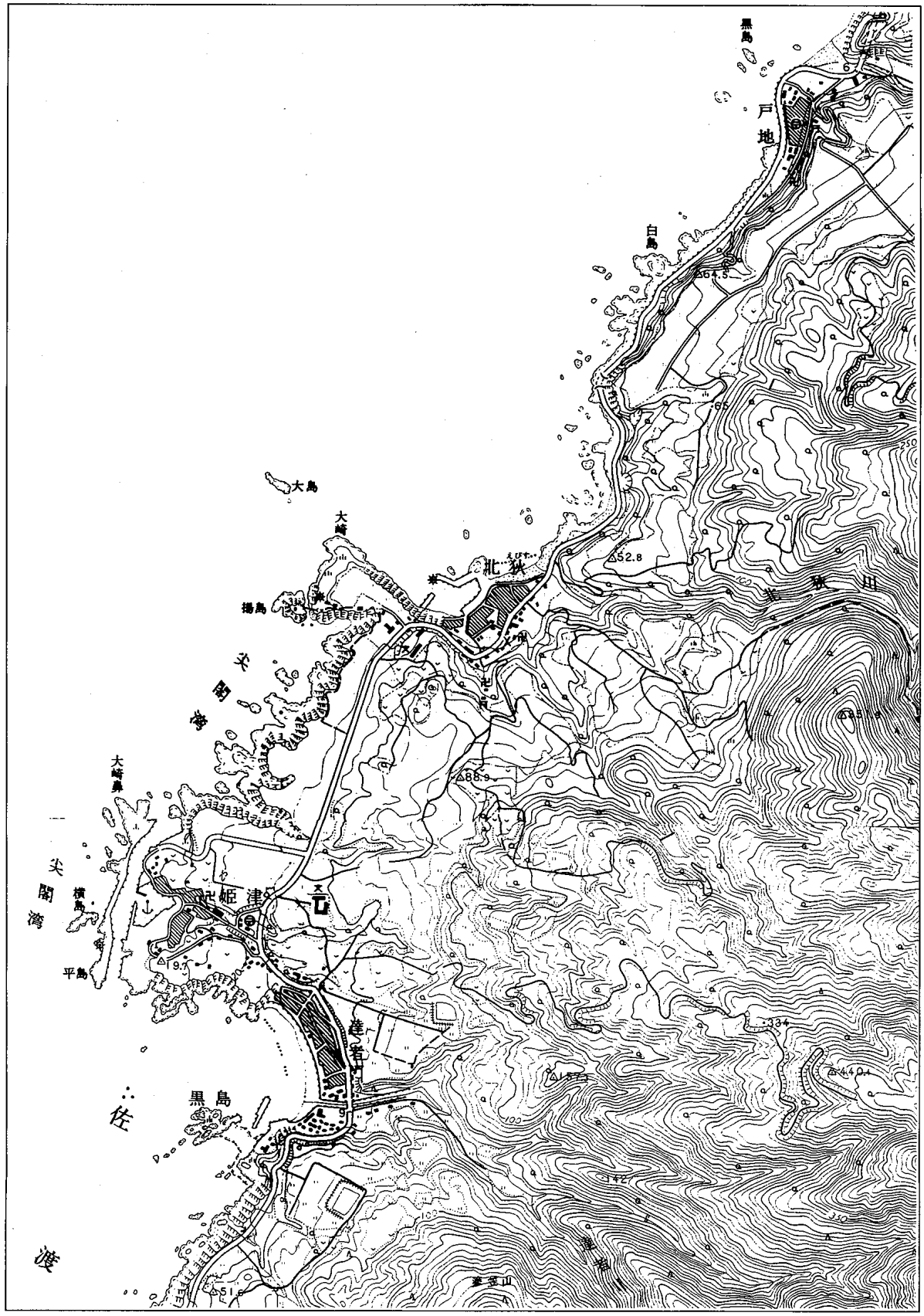
本調査当時、新潟県の佐渡郡においては、裸潜水漁によってアワビ採取をおこなっている地域はなかった。アワビ採取はすべて「イソネギ」とよばれる船上からの「見突き漁」によるもので、他の魚貝藻（魚介）類の磯魚も同じであった。

佐渡郡外海府の相川町北狄には調査当時、北狄漁業協同組合が独立してあり、「金泉」にはこの他に中央（姫津）漁業協同組合、南部（小川）漁業協同組合がそれぞれあった。

この地域の人々の生業は農業中心で、男達は春先になると山の雑木を切って薪（たきぎ）をつくる山仕事や炭焼をしたり、船乗りとして出稼ぎにでるなどして生計をたててきた。あわせて、農業のあいまに地先の海での漁業もおこなってきたのである。

（二）漁業生産歴と漁法

田畑の仕事や山仕事の閑なときで、海が凪の日があれば周年、海に出て「イソネギ」をおこない、アワビやサザ



新潟県佐渡郡相川町北狄（金北山）
国土地理院発行　1：25,000

エ等を採取してきた。しかし、姫津の漁民のように沖合にまで出漁することはなく、地先の磯漁に限られてきた。

小川　博氏が「佐渡島民俗聞書抄」で「北狄では農家が漁師を副業としてコフネでイソミをする」[注(1)]と記しているように、アワビ・サザエ等を船上から採取してきた。主な漁期は十一月初旬から翌年の三月いっぱいだが、凪の日であれば周年おこなわれてきた。

また、寒い時季になるとイソネギによる「カンダコ」突きもおこなわれてきた。カンダコはおおきなものになると八貫目から十貫目もあった。所謂「ミズダコ」の捕獲である。

「蛸は冬至頃から産卵のために沖から磯近くにやってくる。それ故冬至から三月頃の海中の藻が切れて海底が明るく見える冬期間が漁期である。一冬百頭近くのマダコ（和名ミスダコ・メスの蛸をいう）とミズダコ（オス蛸）をとる漁師もいた」[注(2)]といわれるほど漁獲も多かった。

佐渡では一般的に、学問的な分類とは別にメスのタコをマダコ、オスのタコをミズダコと呼んで区別してきたのである。

この他、主に九月初旬から十月いっぱいの期間、タコ（マダコ・和名）の捕獲をおこなってきた。「サビキダコ」または「タコサビキ」とよばれてきた。

新潟県佐渡郡相川町北狄の漁業生産暦（新暦）　北見芳行氏聞書（昭和4年8月30日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘　要
イソネギ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	アワビ・サザエ カンダコ
サビキダコ									―	―			タコ
バンジョウ						―	―						つかみどり

（昭和47年10月2日調査）

サビキダコとは、干潮時に岡（陸）から岩礁地帯を渡り歩きながら小さなタコ（マダコ）を捕獲する漁法をいう。その方法は、タコ穴と思われる穴の中に、シイラなどの魚の皮を乾燥させたものや赤い布ぎれを竹棹（竿）の先に付けて入れると、タコが足を出し、これにとびついてくるので、長さ一間半から二間（普通は十五尺ほど）の竹棹の先端にイカ釣り用のカット（釣鉤）状のものを付けて、引っかけて捕獲する。この道具を「タコガサ」とか「ガサ」といった。タコは縄張りをもっているので、こうしたものを穴の中に入れるとかかってくるのだとも聞いた。こうした漁に出かけることを「タコをサビキに行く」といった。

佐渡ではサンマを方言で「バンジョウ」という。「バンジョウ」とは家大工や船大工のことを意味し、「番匠」の表記もある。

バンジョウは農あがり（田仕事がいちだんらくした）の五月二十日頃から七月初旬にかけて手掴で漁をした。日本海の沿岸地域の一部には、サンマが初夏になると産卵のために岸近くに寄ってくるので、このサンマを手掴で捕える漁法が伝えられており、一般に「手掴漁」といわれている。

手掴漁は船の周辺にアラゴモ（荒菰）やタワラ（米俵）を二～四枚ほどつないで海面に流し、船の中で横になり、頭を見せないように待っていると、バンジョウが産卵のためにアラゴモなどの下に集まってくるので、船端とアラゴモなどの間に手を入れ、指の間にはさみとる。

漁獲量の多いときは十分間で五十匹以上も獲れることもあった。が、新潟地震以後は、バンジョウは不漁になったという。

北狄では姫津のように沖合に出漁してスケトウダラをハエナワで漁獲したり、イカ釣りしたりすることはなく、「ネギ」だけに限られてきた。それ故、農閑期における磯漁との組み合わせの生業は、農耕生活と漁撈生活という伝統的な自給自足的な暮らしの延長として、海とかかわりあいのしかたの一つとして、わが国における伝統的な暮らしの典型を示しているといえる。しかも、山（山仕事）とのかかわりも加わっていることは、より始原的であるといえよう。

（三）農業生産歴と農業

農業にかかわる生産歴をみると自家用の主食になる作物の栽培が多い。

話者の家では、水田を二反七畝、畑を一反五畝を所有

新潟県佐渡郡相川町北狄の農業及び山仕事生産暦（新暦）　北見芳行氏聞書（昭和4年8月30日生）

種類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘要
水稲				―	―	―	―	―	―	―			
大麦	―	―	―	―	―					―	―	―	
小麦	―	―	―	―	―	―				―	―	―	
サツマイモ				―	―	―	―	―	―				
馬鈴薯			―	―	―								
サトイモ			―	―	―	―	―	―	―	―			
大豆・小豆					―	―	―	―	―				
＜山仕事＞													
炭焼	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	薪切り等

（昭和47年10月2日調査）

耕作しているにすぎなかったので、農業と山仕事、それにあわせて漁業（イソネギ）という組み合わせで生業を営んできた。

水田耕作による水稲栽培は四月初旬の苗代づくりにはじまり、刈り入れから脱穀作業は十月下旬まで続いた。麦づくりは大麦、小麦ともに九月の彼岸過ぎに種蒔きをおこない、大麦は五月下旬に刈り入れをおこない、小麦は約一ヶ月遅れて六月下旬に収穫した。

サツマイモは四月初旬に苗床づくりをはじめ、収穫は九月下旬におこなわれた。

馬鈴薯は三月初旬に種イモを植えれば、五月下旬には小さいながらも新しいイモを掘ることができた。

サトイモは三月初旬に植え、十月の中秋の名月頃に掘りあげることができた。大豆、小豆はともに五月初旬に種蒔きをおこない、十月初旬に収穫した。

その他、人参、ゴボウなどの自家消費用の野菜もわずかながら栽培してきたが、商品になるほどの量や質ではなかった。

北狄では山仕事として年間を通して炭焼をおこない、山から海岸に運び出し、船を用いて搬出していた。また、春先に雑木の伐木をおこない薪づくりをさかんにし、秋口になると山からおろし、船で運び出した。

（四）イソネギ（漁法）と漁具

「カンコ」と呼ばれる小型漁船の船上から海中、海底を覗き、魚貝藻（魚介）類を見定め、各種の道具（漁具）で捕採する漁法を北狄では、「イソネギ」と呼んでいることは上述した通りである。

前述の如く、北狄ではアワビ・サザエを採取するために裸潜水漁をおこなうことはなく、主に十一月より翌年三月下旬まで、「イソネギ」でアワビ等の採取をおこなってきた。

イソネギによりアワビ採取をおこなう場合には、「カンコ」と呼ばれる小船の船上より海中、海底を見定め、棹（竿）の先に付けた鉄製の「カギ」を用いてアワビをかけとる。深い場所では十尋（一尋は五尺）ぐらいまで棹を使うことがあるので数本をつなぐ。この際、棹の先端が良く曲がるように、先端部分にはイタヤ、ツルノキなどの材を山から切ってきて用いた。鉄製のカギは長さ約十五センチ、カギの幅は約十センチ、最も太い根元の部分の直径約一・五センチで、先端にいくほど細くなっており、カギの先端にカエシはついていない。（写真参照）

サザエは三本の「ヤス」を縛ったものを棹の先端につけて採取した。カギやヤスなど、鉄製の漁具は北狄にあった鍛冶屋に注文して製作してもらった。北狄にも佐渡金山（鉱山）関係の鍛冶屋があったので、鉄製の道具など、かなりはやい頃から注文におうじてくれていたようだという。

イソネギでカンダコを捕獲する場合には、先端が三本に分かれている「タコトリヤス」を用い、このヤスで突き

とる。（写真参照）

タコトリヤスの大きさは、鉄のヤスの全長約二十五センチ、三本に枝分かれしている根元より先端までの長さは約二十センチある。横幅は先端部分でおよそ六センチ、太さは枝分かれしている部分で約一センチ。先端にいくにしたがってやや細くなっており、カエシが付いている。カエシの長さ約三センチ。

ガラスの付いた「ハコメガネ」は明治時代の中頃に入ってきたといわれている。このハコメガネを使ってカジメ切りもおこなったという。

ハコメガネが明治の中頃に使用される以前は、海底を見定めるために、アワビのワタの油を海面に流してイソネギをおこなってきたと聞いた。

同じ佐渡でも小木方面では「ハコメガネ」を「ガラスバコ」と呼んでいる。「ガラス箱は明治二十年前後に、関西方面から、船乗りの手によって伝えられたと言われている。この時、板ガラスとガラス切りを持って来たそうで、これを、船大工が、箱にはめ込んでガラス箱を作った。ガラス箱は、木流方面へ行くとカガミとも言われている。このガラス箱が、使われる以前は、イカのキモを腐らせてしぼった油を、竹筒に入れ、それをタンポンにしませて海面にふりまき、小波を消して、船上から素目で見ていた。この竹筒を「ネイショ」、あるいは「ネイショツボ、」又ある地域では「イカのシオカライレ」と言い、中のタンポンを「シオカラのまき棒」と言って、これを船べりに下げて、出漁したそうである。この場合、海底を透視できる能力は、せいぜい六ヒロ（一ヒロは一・五メートル）くらいであり、ガラス箱を使うようになって、十二ヒロの海底の物が漁獲できるようになり、種々の漁具が大型化

してきた」注(3)という。

北狄ではハコメガネが導入されてからもヤスを用いて魚突きをおこなうことはほとんどなかった。もとより農業中心の暮らしのため、沖に出る漁や熟練した技術を必要とする魚突きなどはおこなわれなかったのである。同じように南佐渡の小木地方でおこなわれてきた夜間にガンガラとよばれるタイマツを使ってのスズキ突きなどの「ヨズキ」（夜突き）もおこなわれていなかった。

海藻採取のうちカジメは「モテノボウ」と呼ばれる棹の先端に二本の細長い棒をしばりつけた道具ではさみ、ねじりまいて採取するか、カマを用いて刈りとる。刃の部分が一尺ほどのカマで、ワカメを刈る時も同じものを用いた。「ワカメガリガマ」の名もある。

カジメは、越後地方の百姓が毎年、田植えが終わった祝いに食する習慣があるといわれ、出荷していたこともあったという。

夏になるとエゴ（イゴ）採取がおこなわれる。土用波で海が荒れるとエゴが根元から切れて一ヶ所に集まるので、海底に集まったエゴを「エゴ（イゴ）トリ」と呼ばれる鉄製のカギでからげるようにして掬いあげる。カギは四本のものから十本のものまである。

また、モズク（モゾク）は「モズ（ゾ）クトリ」と呼ばれる道具で掻き取る。この道具は太い針金（十番線）を四本ほど曲げて熊手状として自製したものや、鍛冶屋に注文して製作してもらった櫛状の目（刃）が六本、あるいは八本のものがある。

テングサ採取も「モズクトリ」の櫛状のものを用いておこなわれてきた。

北狄で普通「モ」（藻）と呼んでいるのはギンバソウのことで、モを採取して畑のナガイモ作りの際など、畑を乾燥させないため日よけとして畑に敷いたというが、畑の肥料に用いることはほとんどなかったという。その理由は、近くの姫津（純漁村）でイワシ・サンマ・トビウオ等が豊富に入手できたり、姫津で魚の肥料を一樽単位で入手し、田畑の肥料にすることが比較的よういであったためだという。イワシやサンマなど地元でも入手できた。

その他、夜メバル釣りなどをおこなうこともあったという。

（五）カンコ（漁船）・その他の聞取り

イソネギに使用される小型漁船を「カンコ」と呼ぶことは前述した。

カンコの大きさは、肩幅三尺五寸から六寸、長さ（トモからオモテの先端までの長さ）が三間半。本調査で実測

したカンコは肩幅一メートル十五センチ、全長六メートル六十センチ。ミヨシの高さ（深さ）六十七センチ、トモの高さ（深さ）五十センチ、トモの幅八十六センチで、オキザが付いていなかった。櫓と櫂の両方を使って操船するという。

北狄では山仕事に従事している家が多く、自分の山林を所有しているものも多かった。したがって、話者の家でカンコを建造する場合には、あらかじめの船材（用材）になるような木を選択しておき、材は自分の家の山から切ってきた。船大工は「小川」にいたので、船材自分持ちで、注文製作してもらったという。

カンコを使ってイソネギをおこなう際には、漁場までは櫓を漕いで出かけるが、漁場に着くと、トモの中ほどに、八分板を敷き、その上にワラゴモを編んだゴザ状の敷物を置く、ワラゴモは長めに編み、一部分が船から海面にたれるように置くと、海水が身体にはねないので都合が良い。厚板は「トコバチ」などと呼ばれる。

漁場に着くとトモの中央に敷いたトコバチの上からトモ（後方）を向いて櫂を使って操船する。右手で櫂を持ち、左手にハコメガネ（カガミともいう）を持ち、トモを進行方面にして進む。魚貝藻（魚介）類の捕採は、右手の櫂をカギやヤスにもちかえて獲る。イソネギは一人でおこなうのが最も一般的である。

採取したアワビは殻をはずして茹であげ、その後、天日乾燥して商品化した。大正時代の終り頃までは長崎に送っていた。アワビの量は少ない時は鷲崎からアワビを購入し、同じように加工して横浜方面へおくった。

本調査当時には、佐渡郡において裸潜水漁によるアワビ採取はおこなわれていなかったが、それ以前には若干の

裸潜水漁もおこなわれていたことがあった。

近くの「小川」では、大正の中頃からクグリをおこなってアワビ採取がおこなわれるようになった。潜水用のメガネができてからのことであるという。当時はカンコ（小船）を使って沖に錨をうち、アワビ・サザエ・テングサを捕採していた。ヤスも使っていた。しかし、それも専業でおこなっていたわけではなく、兼業（副業）としてであった。現在では裸潜水漁はおこなっていない。しかし、ここ二十年ほど前、「小川」には商売で潜っていた人もいたと聞いた。

北狄でも大正十年頃になると、「小川」のクグリを見て、田畑の草を取る「カギ」等を持って海に潜り、アワビ採取をおこなう人もいたが、専門でおこなった者はいない。それも、潜水用の二つメガネが普及しはじめた大正十年代になってからのことであったが、長い年月は続かなかった。「小川」や北狄では潜ることを「クグル」といっていた。

両津の真更川に、能登の海女が二十年ほど前から来てクグリをおこなうようになった。これは磯の権利を売って海女にアワビ等の採取をおこなわせるようになった結果である。

（六）まとめ

この資料調査は著者が昭和四十七年（一九七二）十月二日に実施したものである。調査の内容は新潟県佐渡郡相川町北狄七八六（現在は佐渡市北狄七八六）に在住の北見芳行氏（昭和四年八月三十日生）からの聞取りをまとめたものである。あわせて同地の斉藤源太郎氏（明治二十年十月十八日生）と斉藤伝蔵氏（明治四十年六月六日生）の両氏からの聞取りにより補填した。

さらに、本稿をまとめるにあたり、資料整理をおこなった際、あらためて確認したい調査内容がいくつかあったが、話者の北見芳行氏はすでに他界していたため、奥様の北見マツミ氏（昭和七年二月二十日生）から聞取りの結果により確認した。

また、本調査における漁具（民具）の実測は話者の北見芳行氏が所有していたものである。

上述したように、海とかかわりあいのある北狄の暮らしは、イソネギだけに限られてきたといっても過言ではない。それ故、農業と磯漁という組み合わせの生業は、農耕生活と漁撈生活という伝統的な自給自足の暮らしの延長として、海とかかわりをもつ暮らしの形態の一つの典型を示している。あわせて山仕事（山樵）とのかかわりが深いことは、より始原的であるといえよう。すなわち、農耕・漁撈・山樵・という三つの生業が組みあわせになり協力しあっていかなければ家計が成り立たないという厳しい条件での暮らしが基盤になっているのである。このことは磯漁をおこなってきた村々の共通点であるともいえる。

しかし、磯漁をおこなってきた村々は、毎年、四季折々に確実にもたらされる自然の恵み（資源）にささえられて村を存続させてきた。

また、水産資源を守り、枯渇させないために、あるいは村民の平等を原則とする磯漁場の利用方法をはじめ、いろいろな制限や約束ごとをつくり、それを遵守してきた。

その他、明治の中頃になって北狄に入ってきたといわれる「ハコメガネ」（ガラスバコ）使用以前の伝統的な漁撈法（漁撈技術）についても貴重な事例を掲げることができことは、今後、この方面の研究をまとめあげていくために重要であり、一つのテーマにもなりうるものであるといえる。

また、このことにより漁具の大型化と磯漁場のさらに深場への進出も課題の一つであるといえる。さらに、南佐渡（小木）における「夜突き」についてもふれたが『南佐渡の漁村と漁業』によれば、「夜間、照明を使って行う突き漁をヨヅキという。地域によっては、ヤジとかヤゼとも言うが、漁具は各種のヤスを使うが、ヨヅキ用に、特別大きなヒラヤスを持つ者もある。これは、スズキを突くために鍛冶屋からつくってもらうのである。

照明の道具は、ガンガラであった。船べりより外側へ鉄製のワクを出し、その中で、こえ松を燃やしたもので、これは、イカ釣りに使ったものと同じである。もう一つは、シノ竹を束にしたもので、直径十五センチ、長さ三メートル前後のものを燃やして、照明にした。このタイマツは、一束で三十分くらい燃え続け、これを五～七本持ってヨヅキに出た。

昭和三年頃に、カーバイトを使ったガス燈が小木三崎で始(初)めて使われた。高さ一メートル余りの円筒状のもので、夜間でも六～七ヒロの海底がはっきりみえたという」注(4)と記されているように、磯漁と夜業（夜の磯漁）とのかかわりは、北狄ではその事例をあげることはできないが、今後の磯漁伝統の研究における大きな課題の一つであるといえよう。

なお、本稿執筆のための資料調査にあたっては、当時、相川郷土博物館の学芸員であった柳平則子さんにご協力をいただいた。話者の皆様ともども末筆ながら謝意を表するしだいである。

(3) 小　括

佐渡島については、「北は大佐渡、南は小佐渡、中の国中米どころ」という表現がある。その大佐渡にあたる佐渡島北部の西海岸を「外海府（そとかいふ）」、東海岸を「内海府（うちかいふ）」と呼んできた。

外海府は冬季になると「シベリヤおろし」と呼ばれる強風が吹き、海が荒れて漁業にさしさわりのある日々が続き、この時期になると出稼ぎにでる人々が多いのに対して、内海府は冬季でも背後の山に風がさえぎられて、外海府より漁業に従事しやすい。

本稿ではこうした自然条件の厳しさが異なる内海府の村（北小浦）と外海府の村（北狄（きたえびす））の二つの村を調査地に

選んだ。

上述した通り、佐渡島では、小船の上から海中・海底を透視し、魚貝藻（魚介）類を突刺具や鈎具等を用いて捕採する漁法を「イソネギ」と呼んできた。一般には「磯漁」・「磯見漁」・「見突き漁」などと呼ばれている漁法である。「要旨」あるいは「研究目的」の項においても述べた通り、「イソネギ」に類する漁撈活動は裸潜水漁との組みあわせでおこなってきた地域（村）が全国的に分布（点在）している。それは捕採時期によるちがいで、夏季（期）は裸潜水漁により魚貝藻（魚介）類の捕採をおこない、冬季（期）には見突き漁をおこなう。

しかし、本稿であつかった二地域（村）は共に「イソネギ」しかおこなっていない。わが国の磯浜海岸を主とした漁場で裸潜水漁撈者が稼働している地域（村）を調べてみると、点在している地域（村）が限られている（限定的な）のに対して、見突き漁をおこなってきた地域（村）は、その分布地域が線の状態で結ばれ「より一般的である」ことがわかる。このことは、見突き漁が「徒見（かち）突き漁」からはじまり、船を利用して、どこの村でも地先の漁場を伝統的に利用してきた結果であるとみられ、始原的な漁法であることがわかる。

しかしその内容（漁撈習俗）をこまかくみると、技術的に差があることがわかる。すなわち、見突き漁をはじめとして専業的に漁業をおこなってきた地域（村）では、見突き漁により、移動のはげしい（速い）魚類が捕獲対象物中にしめる割合が大きいのに対して、兼業的に見突き漁をおこなってきた地域（村）では、すばやく移動する魚類まで捕獲対象とせず、貝類や藻類あるいはタコ・ナマコ・ウニ等の捕採にとどまり、魚類等を捕獲対象としても磯魚のわずかな種類に限られている。

このことは、見突き漁をおこなう地域（村）の中にも、技術的に優劣の差があることを示しており、地域（村）

の内部においても技術的較差として専門的度合を生むことになる。

こうした視点からみると、本事例にみた二つの地域（村）は、「イソネギ」（見突き漁）はおこなってきたが兼業的であるだけに技術的水準は高いとはいえない。

なお「イソネギ」に関しては「水津から岩首あたりまでは〈イソナギ〉というところもある」[注(5)]という調査結果もある。あわせて同書によれば「漁師に聞くとネギは〈櫂をネル〉というところからきているという。『北小浦民俗誌』でいう山陰の海底をナギ採る意味には考えていない」としているが、その方が当っているであろう。

また、佐渡島には「ハンギリ」とよばれる「タライブネ」があるが「ハンギリの櫂をネル場合のワラナワを（ネリワ）といっているが、カンコもトモのトコバで櫂をネル動作が磯ネギの重要なすがたであるから、イソネリからの転用語であるというのが実状にちがいない」としている方が説得力がある。

注

(1) 小川　博「佐渡島民俗聞書抄」『相川郷土博物館報』第四号　相川郷土博物館刊　一九六五年

(2) 池田　哲夫「蛸漁とタコセ・佐渡・内海府の蛸漁」『もの・モノ・物の世界』（新たな日本文化論）　三九八頁　雄山閣　二〇〇二年

(3) 南佐渡漁撈習俗調査団『南佐渡の漁村と漁業』九七頁　テム研究所　一九七五年

(4) 注(3)に同じ　一〇八頁

(5) 両津市郷土博物館編『海府の研究』(北佐渡の漁撈習俗)両津市郷土博物館　一五頁　一九八六年

参考文献及び引用文献

小川　博「佐渡島民俗聞書抄」『相川郷土博物館報』第四号　相川郷土博物館刊　一九六五年

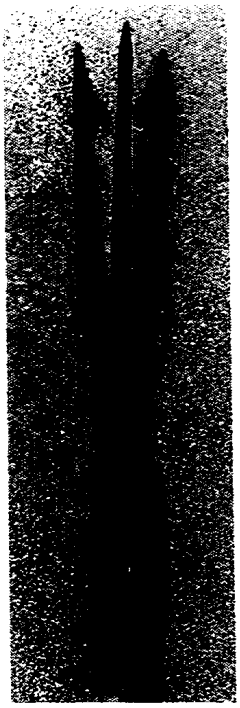
小川　博「漁撈技術と習俗・佐渡のイソネギ漁撈」『佐渡―自然・文化・社会―』九学会連合佐渡調査委員会編　平凡社　一九六四年

両津市郷土博物館編『海府の研究』(北佐渡の漁撈習俗)両津市郷土博物館・池田哲夫　一九八六年

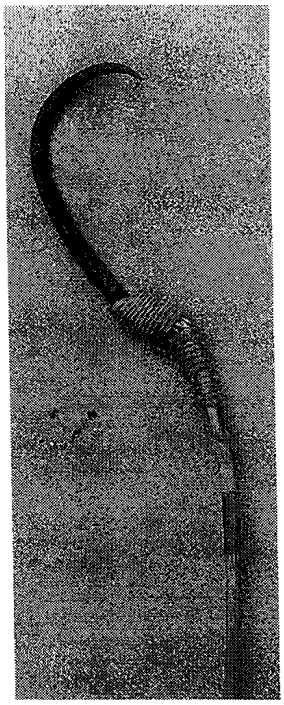
小川　博「姫津漁村の展開―佐渡における貧技術段階の漁撈」『人類科学』第一五集二二一頁～二二八頁　九学会連合　新生社刊一九六四年

(たなべ　さとる　本学教授)

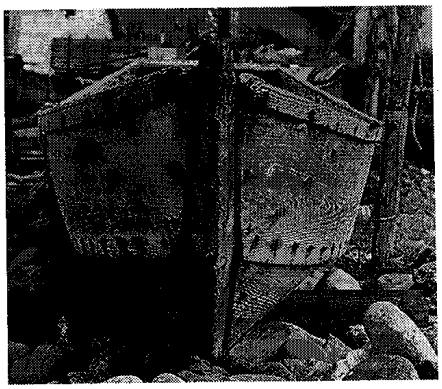
カンコ



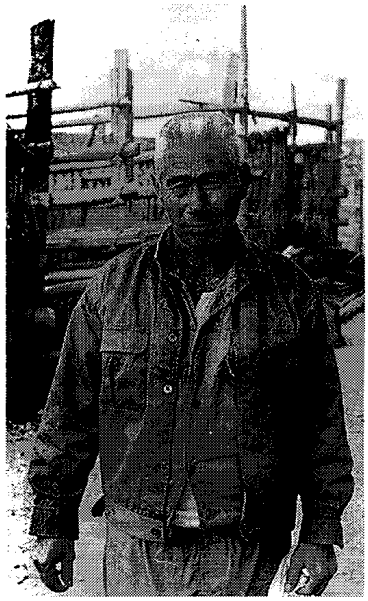
タコトリヤス



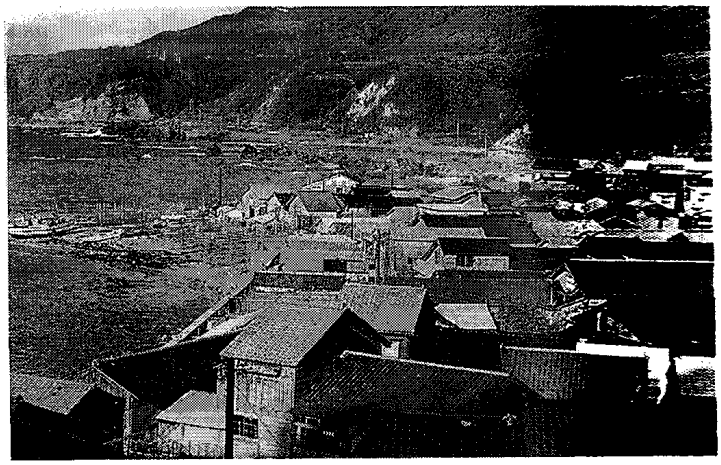
カギ



カンコ（前）



話者の北見芳行氏



北狄の集落